

家事代行

隠れD Sのお兄さん

を頼んだら

から

話がついてきた

れろれろ♡♡♡
クニニ
おまんこサービス

家事代行を頼んだら隠れドSのお兄さんから
れろクンニでおまんこイくイく♡♡サービスが付い
てきた話

私：フリーランスでライターの仕事をしている。締め切りに没頭すると家事が完全におろそかになり、ズボラな一面を持つ。ストレス発散のための自慰が習慣化しており、恋愛・パートナー不在の寂しさも抱えている。基本的に受け身で、拒みながらも体が正直に反応してしまうタイプ。

銀城真琴（ぎんじょう まこと）：182センチ、70キロ。26歳。家事代行「家事助太刀部隊」のスタッフ。爽やかで礼儀正しい営業スマイルの裏に、屈託ない笑顔のまま相手を言葉巧みに追い詰める策士な一面を持つ。相手の態度が気に入らないと敬語が抜け、命令口調で強引に支配する素の顔を見せるが、乱暴さの後には必ず甘やかしが伴う。常に主導権を握り続ける。乱暴さと几帳面さが矛盾なく同居しているのが核。

締め切りまで、あと1週間。原稿と睨めっこしているうちに、部屋の方が先に締め切りを迎えていた。

気づけば埃は積もり放題、抜け落ちた髪の毛は床の上でオブジェと化し、洗濯物はソファの背もたれを侵食して小さな山脈を築いている。

生ごみを捨てる事だけは死守しているあたり、我ながら最低限の理性は残っていると褒めてやりたい。

水回りもいつの間にか白く曇り、鏡よりも先に蛇口の水垢と目が合う毎日。ベッドのシーツに至っては最後に替えた記憶がなく、もはや化石扱いである。

そのシーツの上では、お気に入りのぬいぐるみと大人のおもちゃが妙に仲良く同居していて、誰かに見られたら即座に舌を噛みちぎって死ぬ覚悟ができていた。使えばなしのパイプやテングエッグ、ぬいぐるみにも申し訳ない。このままではゴミ屋敷一直線。ゴミ屋敷経験者だから救いよう

がない。

思えば昔から、ストレスが溜まるとオナニーをする癖があった。若い頃はそれを単なる性欲だと思い込んでいたけれど、大人になった今ならわかる。あれは性欲じゃなくて、ストレスの逃がし方だったのだ。

自分で慰めるのも悪くないが、たまには誰かに触れられたいと思う夜もある。とはいえ、今の私に恋愛をしている時間などない。一人でするより二人でする方がきっと心は満たされるのだろうが、肝心のパートナーがないのだから、選択肢は最初からひとつしかなかった。

心が満たされないぶん、体だけは正直だった。一度始めれば三回いくのは当たり前。しても、しても、物足りなさだけが募っていく。その間にも締め切りは容赦なく近づいてくる。よくないとわかっていても、これをしてないと妙に頭がすっきりしないのだから仕方がない。

——なんて、うだうだ考えている場合ではない。現実には締め切りも部屋も待ってくれない。

原稿の手が止まった隙にスマホを開き現実逃避がてら「家事代行 相場」と検索すると、一番目立つバナーが視界にねじ込んできて思わずタツプ。開いた途端、待ってましたとばかりにポップアップが飛び出した。

『初めての方限定！ルーレットを回してクーポンをゲット』

どうせ当たっても10%オフだろうと高を括りながら会員登録を済ませ、軽い気持ちで指を滑らせる。

——結果は、まさかの大当たり。

『3時間500円、気になる場所やり放題クーポン』

二度見した。安すぎて逆に不穩である。慌てて口コミを覗くと星の数はやたら多く、どうやら一日一本しか出現しない当たりくじらしい。冷静さ

より好奇心が勝った指は、気づけば申し込みボタンを押し終えていた。



そして当日。やってきたのは、想像を180度裏切る人物だった。

「こんにちは！【家事助太刀部隊】からやってきました、銀城真琴（ぎんじょうまこと）です！本日はよろしくお願いします！」

「アッ…ス…」

てっきり年季の入った家事のプロ、お母さん世代のベテラン主婦が来ると信じ切っていたのに、玄関の向こうに立っていたのは爽やかでキラキラと若い男。しかも、妙に整った顔をしている。

私はドアノブを握ったまま、しばらく現実逃避を試みた。

「わっ、リアクションありがとうございます！よく驚かれるんです、僕みたいなの来ると」

「あ、はは…」

銀城と名乗った男は、白い歯を見せながら軽い調子で笑った。大きなボストンバッグを肩から下ろすと、礼儀正しく玄関先で一礼してリビングに入る。持っていたバインダーに目を通して確認を取っていた。

「今日は3時間、やりたい放題パックでよろしかったですか？Webのアンケート拝見しました。水回りと洗濯、あと——クローゼットの中がちょっと大変なことになってる、とのことだ」

「はい……大変なことになってます」

正直に答えるしかなかった。誤魔化したところで、どうせ後でバレる。

「浴室乾燥もオッケーいただいてたので、洗濯物はそちらで。クローゼットは中身を全部出して、畳んで収納する感じで進めますね。あ、触られたくない場所とかあったら、遠慮なく言ってください」

「特にないです。クローゼットは……一旦全部出してもらって大丈夫なので、綺麗に戻してもらえると助かります」

「了解です！あ、それと——デスク周りも結構埃が溜まってるみたいなので、そこらも掃除させてもらっていいですか？よろしければ、キリのいいタイミングでソファアの方に移動していただけると助かります」

「あ……はい、大丈夫です」

自分のデスク周りの惨状を思い出し、今更ながら顔が熱くなる。

「ありがとうございます！家の中、ちょこちょウロウロすると思うんですけど、その辺はご容赦を」

「とんでもないです。今日はよろしく願います」

銀城さんはにこりと笑うと、ボストンバッグからエプロンを取り出し、あつという間に作業モードに入った。原稿の区切りがついたところで、私はソファアーに移動してノートパソコンを開き直した。

視界の端では、銀城さんがデスク周りを手早く片付けていく。散らばった資料を几帳面に揃え、埃を払い、コード類まで綺麗にまとめている。そのままりビングの方にも掃除機をかけ始め、ソファアーの下や棚の隙間まで丁寧に埃を吸い取っていった。窓を開けて空気を入れ替え、テーブルの上のマグカップも回収されていく。

自分の部屋なのに、他人の手でみるみる生まれ変わっていく光景は、なんだか妙にむず痒かった。

最初のうちは、銀城さんが家の中を動き回る気配が気になって、原稿に集中できなかった。けれど締め切りというのは恐ろしいもので、気づけばまた画面に没頭していた。肩を軽く叩かれて、我に返る。

「すみません、お仕事中に。一通り終わったので、確認お願いできますか？」

「え、早いですね」

ソファから立ち上がると、背筋がバキバキと音を立てた。座りっぱなしの代償だ。

「だいぶお疲れみたいです」

「は…座り仕事はキツイです」

案内されるまま、まずは脱衣所へ。抜け落ちた髪の毛はきれいさっぱり消え、埃ひとつ落ちていない。恥ずかしいくらいだった。浴室を覗くと、洗濯物がずらりと吊るされている。浴室もぴかぴかだ。

——が、その中に、見覚えのある下着が数枚、堂々と干されていた。

銀城さんにはっこり笑って「こんな感じです」とだけ言う。私は俯いて「ありがとうございます」と絞り出すのが精一杯だった。気になるところは、と聞かれても、頭の中は下着のことでもいいで「大丈夫です」としか言えない。

次にキッチン。水垢が消え去り、新築のような輝きを放っている。

「汚れがそこまで酷くなかったので、すぐ終わっちゃいました」

そして、寝室。

シーツはすでに新しいものに替わっていて、色が違うのが目の端に映る。

開けっぱなしだったクローゼットは、きっちり閉まっていた。開けて確認すると、服が色分けされて綺麗に並んでいる。

「長袖と半袖で分けて、上段に靴下とインナー、真ん中にトップス、下段にボトムスを入れておきました」

「ありがとうございます……」

「あと、シーツなんですけど。前使ってたもの、穴が空いてたのでこちらに置いておきました。どうします？」

「あー、処分……っ?！」

そう言われて視線を落とすと、穴の空いた古いシーツが、わざわざ穴の部分を上にして広げられていた。その隣には——今の今まで散々お世話になっていた大人のおもちゃが、一列に並べられている。まるで押収された証拠品のような、綺麗な並べ方だった。にこっと笑われて、羞恥で顔が焼

けそうだった。

「これ、テングエッグですよ。まだちょっと湿ってましたけど」

そんなことまで言われるとは思わず、私は心の中で全力で銀城さんを恨んだ。

「うちの店、作業終了後、サービスタイムがあるんですよ。やり残したことがあれば、追加で綺麗にできるんです。例えば――」

背後から、ふわりと抱きしめられる。

「おまんこも、綺麗にしてくださいませんか？」

「なっ…!？」

耳元で囁かれた声は、さっきまでの営業スマイルとは、まるで違う響きをしていた。

「な……何言って……そんなサービス、頼んでません」

とっさに体を離そうとするが、筋肉質の腕は思ったより緩まない。

「そうですね、頼まれては 아닙니다。けど、これは提案の一つであって。追加でトイレ掃除でもいいんですよ？」

「提案って……っ、」

声が上がっているのが、自分でもわかった。説得力のかけらもない。

「あれ？据え膳じゃないんですか？」

にこにこと、あまりにも屈託のない明るい声色で言われて言葉に詰まる。

「据え膳って…わ、私が散らかしてたのが悪いんです…」

「またまた。本当はわざとでしょう？」

「はっ？わざとって…」

「片付け忘れたフリして、僕に見つけてほしかったんじゃないですか？お客様、意外と大胆なんですね」

「そんなわけ…！」

にこにこしたまま、まったく信じていない顔をされる。訂正する隙も与えずに銀城さんは勝手に話を進めて、耳元に落ちる声が少しだけ低くなる。

「——こういうの、他のお客さんにはしないです。本当に」

「そんな、適当なこと言って……」

「適当じゃないですよ。だって——ここにあるもの、僕も使ってあげたいな、なんて。一人でしてるより、絶対気持ちいいと思いますよ」

「なっ……」

指先が、するりと服の裾から滑り込んでくる。肌を撫でる動きは、驚くほど丁寧だった。

「一人でしてる時より、ず——っと気持ちよくしてあげられる自信、あるの」

「あ、」

「力抜いていいですよ。今日だけは全部忘れちゃってください。僕がぜんぶ綺麗にしてあげますから」

耳たぶを甘噛みされて、思考がぷつりと途切れる。

「無理にとは言いません。でも——本当に、要らないですか？」

まともに答えられる自信がなかった。

返事を待つ様子もなく、銀城さんの手は次の動きに移っていた。

「あ、待っ……」

言葉は最後まで形にならなかった。ベッドに優しく押し倒されると、その拍子にぬいぐるみがころんとシーツの上から落ちた。

「あ」

思わず声が出る。銀城さんはすかさず床からぬいぐるみを拾い上げると、ベッドサイドにちょこんと座らせた。

「ぬいぐるみにも、見てもらいますか？」

にっこり笑ってそんなことを言う。

「な、なに言って…！」

慌てて否定しようとするが、銀城さんはもう聞いていない様子で、視界いっぱい顔に顔を近づけてきた。相変わらず笑っているのに、目の奥だけが違う色をしていた。